

学会等受賞論文の概要

| | |
|------|---|
| 受賞者 | 上野 裕介（防災・メンテナンス基盤研究センター緑化生態研究室） 【共著者】 曾根 直幸（同上） 栗原 正夫（同上） |
| 論文題目 | 都市化が生物多様性に及ぼす影響 ～ 都市化度×パッチ面積×分類群の交互作用 ～ |
| 授与機関 | 日本景観生態学会 |
| 受賞時期 | 平成26年6月 |
| 受賞内容 | 第24回日本景観生態学会ポスター賞 |
| 論文概要 | <p>近年、都市においても生物多様性への関心が高まっている。国土交通省としても、都市の生物多様性指標（素案）を公表するなど、地方自治体による都市の生物多様性確保の取り組みを促進している。一方で、都市の生物多様性のパターンやその決定要因については、情報が乏しく、よくわかっていない。したがって今後の都市・緑地計画において、人々の暮らしと生物多様性の保全を両立していくためには、緑地の量や配置、質が如何に生物多様性に寄与し得るのかという景観生態学や都市生態学の知見が求められている。</p> <p>そこで本研究では、都市化の程度と緑地の面積（生物の生息地の面積）の違いが、都市の生物多様性のパターンに及ぼす影響を明らかにするために、東京都心部から多摩地域にかけての大小様々な公園緑地（計60か所）を対象に、複数の分類群（鳥類、飛翔性の昆虫類、地表徘徊性の昆虫類、維管束植物）の生息状況を調査した。</p> <p>その結果、都市化に伴う生物種数の減少傾向は大規模な緑地で顕著に現れる一方で、小規模な緑地では都市化の程度によらず、種数は少なかった。また、都市化に伴う種数の減少傾向は、分類群によって異なり、移動能力の高い生物（鳥や飛翔性の昆虫）では、都市化に伴う種数の減少幅が小さい（影響が現れにくい）ことが示唆された。一方、植物では、人為的な植栽等により緑地によって種数が大きく異なっていた。</p> <p>今後、日本の都市では、人口減少と都市の縮退に伴い、野生生物の生息場所としての都市景観も大きく変化すると予想される。本研究をさらに発展させることで、地域の実情や政策的課題（環境目標など）に応じた緑地の整備や再配置などの技術的支援、都市の生物多様性のモニタリング手法の提案などにつなげていきたいと考えている。</p> |